



北京王府井大通りの人波

大衆の間でも人民解放軍信仰は強い。解放軍は庶民を守るものであり、兵士は模範的な人間であるという常識があるようだ。事実、私が会った人民解放軍の兵士も21才という年齢にもかかわらず、実に礼儀をわきまえた、いかにも誠実そうな人であった。しかし、「修身」の教科にでも出てきそうな話を平然と語るのにはちょっと閉口してしまっただが……。もちろん、こうした、民衆の解放軍に対する信頼感には長い年月にわたる民衆と軍との関係の歴史が培ってきたのであろう。だが、誤解を恐れず言うなら、戦前の日本の軍隊はどうであったろうか。日本人のどれほどが自国の軍隊を「侵略の軍隊」と認識していただろうか。大半の人々が、「軍隊は庶民の生活を守るもの、軍人は最も模範的な日本人。」という作り話を信じていたのではないか。はたして軍隊は庶民を守ることに寄与したか。もちろんそれが日本人の愚かさだと言えればそれまでだが、本当にそれで説明のつくことか。軍勢力というものは必ず武器になるものであり、侵略の道具に転化する可能性を孕んでいるものだと思う。よく自衛のための軍勢力を、家を守る壁や塹にたとえる人がいるが、壁は家を守っても決して人を攻撃したり殺したりしないだろう。しかるに軍勢力とは潜在的に殺人の能力を持っていることにおいて「壁」と区別されるべきものである。このことを彼に理解してもらえないことはできなかった。私も彼の持つ『人民解放軍観』を理解できなかった。彼我の溝の深さを痛切に感じた。

《 阻害するもの 》

戦争のことに触れたついでにもう一つ書き落せないことがある。我々が延安及び西安を旅したときに我々に同行し、いろいろ御尽力下さったSさんという40才ぐらいの婦人についてである。彼女は日本語を耳で聞いて十分に理解できるが、話すのはかなり不自由である。この理由はなかなか複雑である。彼女は東北区（旧満州）の出身で、お母さんが日本人

だということであった。彼女は幼い頃日本支配下の満州で、無理矢理日本語を使わされる中で成長したそうだ。それで日本語が聞いて理解できるということである。しかし、日本が敗走して満州が中国人の手に還り、東北区と名をかえると、彼女たちはいまましい『日本語』を使うことをやめたという。当然のことであろう。我々は何気なく彼女に日本語で話しかけていたが、彼女にとって『日本語』の思い出はそのまま屈辱の時期の思い出だということ私には配慮できなかった。西安の農村を巡っていたとき、私はSさんに不用意にも尋ねてしまった。「日本人は戦時中はずい分ひどいことをしたでしょう。」と。彼女は瞬間顔をゆがめて何も話して下さらなかった。その瞬間、私は自分の質問を恥じた。我々のような戦後世代の人間に何がわかるのだろうか。おそらく、その問題はSさん自身言葉で表現してもわかってもらえるまいと思っておられたのではないか。その後の沈黙のいかに重苦しかったことか。しかしそれはSさんが西安の農村風景に話題を転換して下さったことで救われた。私の「軽率さ」は、Sさんの歩んできた歴史の重さによって叱咤され、救済されることになったのである。Sさんと私を隔てるものはあまりに大きい。そして、中国で始終私が考えたのは、何故私の国の人々はこの中国の人々を目のかたきにして戦わねばならなかったかということである。人々はこの国でも当然のごとく、明るく楽しく快活に生きることを求めている。それを邪魔し、踏みこみつけたのが他ならぬ我々日本人だったのである。そのことは戦後何年たとうと許されるものではない。むしろもっとそのことを直視しなければならないだろう。ありきたりかもしれないが、こういう歴史をもっと深く究明することにより、同じことを二度繰り返さないことを誓わねばならない。いつかもう一度今度は重みのある言葉で、私はSさんの戦争体験を聞きたい。

《 新たなる断層 》

話が少々偏向した気味がある。次に中国の青年の生活について話そう。まず言えることは、彼らは実によく勉強していることである。我々の一員が北京大学を訪ねることができたのだが、彼の話によると、北京大学の学生のほとんどは寮に入って生活しており、その寮というのは一部屋が八人の学生によって使われていてかなり狭小だったそうである。その、あまり良好とはいえない環境の中で、一日のほとんどを自分の専攻している学問の為に費す。一様にま

じめで努力家の学生が多いようである。これは、彼らが文字通りエリート集団であり、国家の中枢を将来構成していくという自覚があるからだろう。私が語り合った学生の中でも前述の華東師範大学の学生にこの傾向が強かった。彼らは熱心に『四つの現代化』について語り、国家の将来について語ってくれた。だが、大衆と彼らエリートの間にはギャップはないだろうか。北京で聞いた話だが、最近『不良』青年が増えているという。失業やインフレなどの社会問題が青年層に反映しているのだろう。もちろん、『不良』といっても我々日本人の考える『不良』と同じとはいえない。「どういう人物が不良ですか」と尋ねると通訳のLさんは「だらしない服装や派手な服装で、街角で女性に声をかけたり、仕事もせずにブラブラしている人物です。」と答えてくれた。北京で全青連（共産主義青年団）の最高幹部の一人である王先生のお話を伺ったときも「最近、一部の若者の中に態度の良い者がいる。」とのお話があった。もちろんそれを社会一般の傾向と結びつけるつもりはない。それにしても、一方で明確な使命感を持ち、エリートとしての自覚もあり、高度の教育を受けている人間がいて、他方でそういうものとは縁遠い世界で『不良』と呼ばれる生活をしている人々がいるという事実は確かにある。それをエリートが大衆から遊離する前兆と考えるのは偏見だろうか。上海の街頭でも多くの『不良』と呼ばれる人々を見た。彼らのうつろな目は忘れることができない。上海の治安が低下し、我々の自由行動が極端に制限されたものになったという事実もある。過去の中国の長い歴史においてそうであったように、知識層がある種の特権的階級に変質してしまう危険は無いのだろうか。

さらに、学生と話し合ったときに疑問に感じたことを書こう。一つは彼らの家庭の状況についてである。学生の家庭は両親もホワイトカラーの場合が多いようである。彼らに聞くと、ほとんどの場合、自分と両親は別々に暮らしているという。さらに家族のすべてがそれぞれバラバラに独り暮らしをしているような場合が多い。しかも幼い頃からだという。彼らの家族は中国の全土に分散してしまい、年に一度か二度会えるだけだという。西安の大学生のRさんという人の話によると、彼は生れてから家族全員がそろって食事をした経験が一度しかないというのだ。驚くべきことではないか。また、通訳のPさんは幼いころから自分の父親を爸爸（子供が自分の父親に

対する場合の呼び方）と呼んだことがないそうである。「では何と呼ぶのか。」と聞くと、「何とも呼ばない。」と答えてくれた。つまり、父親と幼い頃から離れて暮らしているので父親が疎遠になり、親しく呼ぶことができないのだというのである。私は啞然としてしまった。いかなる社会でもやはり家庭というのは社会の基本をなすものではないか。そういうものを国家の政策で意図的に破壊しようとするのは間違っていると思う。こういう政策がいかなる意図で行なわれているのか勉強不足で知らないが、これは人間生活に対する冒瀆ではないか。

さらに、これも各地で聞いた話だが、彼らには職業選択の自由が無いという。幾つかの希望する職種があってもなかなか志望通りにならず、不満を漏らす人も少なくなかった。「日本では自由に職業が選択できるのだそうですね。」と、西安外大のRさんに聞かれ、「はい」と答えそうになってためらった。確かに日本では「職業選択の自由」というものが保証されることになっているが、実際は「職業志望の自由」が保証されているだけである。「いえ、日本でもそう簡単に希望した職業に就けるわけではありません」と答えると、彼はちょっと意外そうな顔をしていた。日本でよく中国を批難する根拠として、「自由がない」ということをよく言う。しかし、我々の「自由」も案外あやふやなものだと言えよう。しかし、とにかく彼らにとって、「職業選択」の問題は当面の大きな関心事であるということだけは言えそうだ。

さらに今ひとつ書き記しておこう。彼ら中国人には国内移動（旅行も含めて）や海外渡航の自由が制限されているらしいということである。例えば上海の学生のほとんどは北京を知らないし、西安の人々は延安を知らない。彼らは自分と特別に繁栄のある土地以外のことはほとんど無知といってもいい。相対的に中国の農村は北部のほうが貧しく、土地も痩せているが、南部の上海周辺は豊かで緑も多かった。（これは農業統計でもはっきり実証されている。）このことを上海の学生のTさん（華東師範大学3年生）に話し、「中国は社会主義国なのに農村の貧富の差が激しいのはおかしいのではないか。」と問うと、彼は、「私は北部の農村を見たことがないのでなんとも言えない。」との答えが返ってきた。

旅行すればそれでいいと言うのではない。しかし、自分の世界を広げ、認識を深める必要はあると思う。豊かな部分しか知らない人が貧しい人々のことをわ

かるだろうか。そういう狭い視野しか持たぬ人が世の中を支えていくことが矛盾を生みはしないのか。彼らはもっと中国自体を知るべきであろう。また、それを制限するようなことは許されまい。海外旅行あるいは留学についてはなおさらである。一般の労働者にカタコトの中国語で「是非日本へ来て下さいね。」と言うと、たいていの人は苦笑して「それは無理だ。」と言うし、そのチャンスが一般の人々よりはるかに多いであろう日本語学科の学生ですら、「幸運に恵まれれば。」とか、「十年ぐらい先には。」などという返事がかえってくる。経済的事情だけなら話はわかるが、それだけではないのである。一方通行で、こちらから行くだけの『日中友好』が健全な姿を成すであろうか。

《文学の周辺状況》

最後に、私がこの旅行で最も興味を抱いていた、文学の現状についての見聞を書くことにする。現代の中国文学は文化大革命と毛沢東の『文芸講話』路線から脱して、ようやく活力をとり戻しつつあると伝えられている。私は各地でこのことを確かめる試みをした。その結果、現代の文学の大きな潮流は次の二つである。一つは、過去の文学者の名誉回復とその作品の再評価である。今まではほとんど魯迅ひとりしか認められていなかった現代文学史上に茅盾や巴金、老舎などの名前が帰ってきたのである。私達が入った街の書店にもそういった作家の本が数多く並んでいた。もう一つは新進作家の活躍である。文革以後のいわゆる『傷痕文学』をも、さらに魯迅らの戦前の作家をも超える新しい文学が次々に生まれていると、上海のTさんは目を輝かして語ってくれた。その例として、讎容という女性作家の『人到中年』という作品と、陳国凱という男性作家の『代価』という作品の名をあげてくれた。彼は、「この作品は知識人の苦悩を描いたものです。」とか、「知識人の間で高く評価されています。」と、『知識人の文学』

自由投稿

母 の 話

亀山は昔から交通の要地であった。交通の主力が人力や馬力から鉄道や自動車に移ってから後も、関西線と紀勢線の分岐点としてその面目を保っていた。当時（今から30数年前）、関西線の上下と紀勢線の3本の列車が正午ごろ亀山駅を同時発車することになっていた。あの日もダイヤ通り3本の列車がホー

であることをさかんに強調した。中国の文学が新しい時代に入ったことは疑うべくもないが、それがもし知識人だけの独占物で労働者や農民を無視したものでしかないなら、毛沢東の『文芸講話』は中国の文学に何も残さなかったことになる。毛沢東の偉大さはまさに大衆のための文化を考え続けたことにあるのではないか。

《終章—別れ、そして新たな旅》

以上、中国をこの目で見て感じたことを気ままに書いてきた。まるで中国の悪口を書き続けてきたかのように見る人もいるかもしれないが私の本意はそこにはない。私にとって中国は希望の国である。日本と同じく愛する価値のある国だと思う。そうであるがゆえ、中国のかかえる問題は日本の社会にも同質の問題が潜在していることを教えてくれると思う。今まで霧の向うに見えなかったものがおぼろげに見えてきた気がする。初めて中国を見ることによって日本をも初めて見ることになったのである。私のこれまでの、自らの無知を省みない拙文はこういう意志に貫かれていたことをわかってもらいたい。

ともあれ今回の旅は私の大学生活で最も貴重な時間であった。今はこの旅のために様々な形で御尽力下さった人々に感謝の気持ちでいっぱいである。日本も中国も、人が生活し、愛し合い、豊かで活気ある暮らしを求めていることに何の変わりもない。しかし、文化や社会構造に大きな差があることも確かである。何より言葉の差は大きい。「人類は一家」などと安易に叫ぶ気には毛頭なれない。しかし、懐疑に陥ち入ることもしたくない。私達に今必要なのはよじれた結び目を少しづつ解いてゆこうとする根気だ。国の首相が往来したからと言って何になろう。それは一つの事件にすぎない。『友好』とか『理解』というものはもっと地味で苦しい継続の中で培われるものだろう。見はるかす上海の緑の大地を飛び立ったとき、私はあらたな旅の始まりを感じた。

5645088 中谷文彦

ムに並んでいたのがあった。やがて各信号機がいつせいに腕を下した。その「ガシャン」という音を待っていたかのようにサイレンが空を覆った、空襲警報。しかし、列車はすでにゴロゴロと動き出していた。列車が複雑な構内ポイントを渡り、軽快な旋律を作り始めた時、戦闘機が2機飛来した。標的に選

ばれたのは紀勢線の列車であった。紀勢線のレールは亀山駅を名古屋寄りに出て、構内を抜けると右へ大きくカーブして築堤、鉄橋を渡り、短いトンネルと続く。その鉄橋を通過中に列車はつかまった。2機の戦闘機は交互に放物線を描くようにして機銃・機関砲をあびせた。次から次へと飛行機の排出する葉きょうや飛行士が操縦桿を握る姿がはっきり見えたという。不運なことは続くものである。機関士が射ち殺されてしまい、負傷した機関助士が鉄橋上で列車を停めてしまったのであった。ハチの巣になるより他に仕方がなかった。戦闘機の去った後、列車は駅まで引き戻されてきた。車内には荷物と死体がころがっている。老夫婦が射ち殺ろされていたし、陸軍の将校がサーベルを抜き「カタキョウチマス」と叫んでいる。若い婦人が背中を血だらけにしてわめきながら車内を探し回っている、機関砲で吹き飛ばされた赤ん坊の首を探していたのであった。

私がこの話を聴かされたのは12才ぐらいの時であった。そして、この事件を私の母が目撃したのも12才のころであったという。京都に住んでいた母

の一家は戦火を避けて亀山に疎開していて、母は姉とともに亀山駅まで手伝いに出ていたのであった。葉きょうやアメリカの飛行士の姿は、防空壕にも入らず機銃掃射を見ていた私の祖母によって目撃されたものである。

小学生のころの私は、他の誰それ同様戦争を「カッコイイ」ものと思いついでいたし、戦艦や戦闘機の名称を学校で教える漢字よりも良く覚えていた。道を誤れば、そこいらの暴走族の成り上がりよりもっとスマートな右翼になっていたかもしれない。

しかし、何かの機会に母の話してくれたこの機銃掃射の話は、戦争に関しあるわだかまりを私の頭に残すことになった。このわだかまりが私に、中国で日本軍のしたことや原爆に出会わしめることになった。そうした様々の出会いやそれによって起こされた文句なしの腹立たしさが、とうとう私をヒロシマまで連れてくることになってしまった。今年の夏、自宅へ帰ったら、もう一度あの話を母にしてもらおうと思っている。

<ソフトボール大会始末記>

—人類学的球戯論序説—

5445095 畑尾 武海

ソフトボール大会を遂行するにあたって、予期され得る最大の障害は「天候」だった。

「天候」。それは、未だ人智の及ばぬ存在である。また、その「天候」を操るのは、人類にとって神とも言うべき「絶対者」であると、我々実行委員は常々考えていた。そして、もしそうなら、ソフトボール大会を意地でも敢行するのは、人類の存在意義がそこにあるように、「絶対者」への挑戦である筈だ。「絶対者」が全宇宙に課した光の速さ—每秒299792.4562 km—に限りなく近付いて行くことが、人類文明のバイタリティーのひとつの証しであるのと同様、雨が降ろうが、槍が降ろうが、ソフトボール大会を行うことは総科生のバイタリティーの証しになり得る筈なのだ。

しかし、しかしである、我々実行委員は、人類が高度な「社会構造」を持った生物であることに起因する別の障害に気付いてしまったのだ。

雨の中でソフトボールを行って、泥だらけになって風邪をひく。槍が降ってきて怪我をする。これは

総科生自身の問題であり、「絶対者」との闘いによることを考えれば些細なことではかない。しかし、雨中での試合はグラウンドを荒らし、槍で怪我をすれば救急車を何台も呼ばねばならない。それは重大な社会的問題を引き起こすのである。

「絶対者」への挑戦は、人類の総意であって初めて価値を持つのである。それに気付いたことで、我々の野望は敢えなく挫折してしまった。

だが、実行委員たるもの、任務を途中で投げ出す



ことは許されない。そこで、我々は姑息にも、それまで挑戦する筈であった「絶対者」に縋ろうと考えた。正に、無節操の極みと言えようが、総科全体のことを考えてのことなのだから仕方がない。とにかく、雨が降ったり、槍が降ったりしては話にならないのだ。

我々は日本文化の中に根強く残る「てるてる坊頭」をぶらさげるのももちろんのこと、文化人類学の本を引っぱり出しては、様々な民族の晴天担当のシャーマンの秘術を研究し「絶対者＝神」に祈った。一時は、生娘を生贄にすることまで真剣に考えたのである。

しかし、そんな努力も空しく、26日と29日の週間予報では31日は雨となっていた。神は我々に何をさせようとしているのか……。

30日も雲の多い一日だった。準備は整っているのだが、天候だけが気掛りだ。私は177に5回も電話したが、何度しても(?)一時的ながら雨が降ると言う。

骰子は投げられた。果報は寝て待つもの。私は最後に八百万の神々に祈ると、早く寝るために飲み慣れぬ酒を飲んだ。

そして31日早朝……。

「やった、雨が降ったらん!!」

学校に行く途中に177に電話しても、「晴れ」とのこと。私は、喜びのあまり電話のあった商店で、目についた檸檬^{れもん}を衝動買いしてしまった。(この行為には『檸檬は小宇宙である』という印象^{イメージ}から発する、観念的必然性があるのだが、ここでは敢えて述べない。)

とにもかくにも、ソフトボール大会は無事行われた。(グローブが1個紛失したのと、救急箱を忘れていたことを除けば。)そして、その後の打ち上げが空前のスケール(絶後でないのは、秋の大会でわかるだろう。)で行われたのは言うまでもない。

でも、「絶対者」との闘い、結局総科生の人徳が勝ったと言ってもよいのではないかな……?

みんな 御苦労さん。

総科生は、みんなで仕事やって

みんなで楽しむんだって思ったけど

やっぱり、そうだった。

秋も頑張ろうぜ!!

総合科学部に乾杯……。

(筆者後記…紙数の関係上、副題とは全くかけ離れたものになってしまった……。)

(編集部 追記：試合の結果は、優勝 情報4年。2位 情報3年。3位 環研2年。)

総合科学部同窓会発足

会長 中 洋一郎

下さり、同窓会は和気藹藹とした雰囲気の中かで、スタートいたしました。

同窓会設立の経緯につきましては既に、『飛翔』で重中先生が詳しく述べられていますように、55年度学活委員長でいらっしゃいました今中先生(現在は法学部へ転出)のお声がかかりで始まりました。



会の開催にあたりましては、連休の初日でもあり、また広島を遠く離れて就職した者が多い為、多数の出席が得られるだろうかと心配もありましたが、遠くは東京方面からも多くの参加があり、久しぶりの再会に、近況あるいは学生時代の思い出、また出席できなかった友人達の消息を語り合う、大変賑やかな会となりました。約2時間のパーティもあつという間に時間がたち、万歳三唱で終了した後は、それぞれのグループが二次回に流れて行ったようです。

式部学部長をはじめ多数の先生方、そして広高同窓会の佐藤会長、土井田常任理事も御祝いにおいて